

STAY

2006(平成18)年4月21日鑑賞(東映試写室)



監督＝マーク・フォスター／出演＝ユアン・マクレガー／ナオミ・ワッツ／ライアン・ゴズリング／ボブ・ホスキンス／ジャニーン・ガロファロー／エリザベス・リーサー（20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／101分）

……何が現実で何が幻か？ 自分は一体何者なんだ？ 自分が今生きている世界はナニ……？ 精神科医と、3日後の21歳の誕生日の日に自殺すると予言した患者との間で、そんな意味シンの「シーン」が次々と……。しかし、「斬新なビジュアル」よりもセリフ劇の方が好きな私には、この2人に絡む女性や盲目の博士を含め、サッパリ訳がわからない。なぜ？ なぜ？ なぜ……？ 「この映画の謎は、頭で考えても決して解けない」し、「あなたの感覚が試される！」そうだから、我こそはと思う人は是非チャレンジを……。もっとも、そういう私はリタイア組を選択したが……？

精神科医 VS 若い患者

この映画は、2人の男の意味シンの「対話」を通じて、何が現実で、何が幻か？ 自分が生きている世界は一体何なのか？ そして自分は一体何者なのか？ という根本的な問いかけをしている映画……。その2人の男とは、精神科医のサム・フォスター（ユアン・マクレガー）と、若い精神病患者（？）のヘンリー・レサム（ライアン・ゴズリング）。

サムがヘンリーのことを気にしはじめたのは、21歳の誕生日の日に自殺すると予言して姿を消したヘンリーが、その直前、「明日は電が降る」と予言をして、ピタリとそれを的中させたから……。そこで、サムは失踪したヘンリー捜しに乗り出したが……？

手渡せない結婚指輪が2つ……？

サムが同棲している女性ライラ（ナオミ・ワッツ）はサムの元患者で、自殺未遂の経歴の持ち主。サムはそんなライラに対して渡すべき結婚指輪を購入しているものの、なぜかそれを渡せないまま……。精神科医のサムは立派な社会人かと思っていたが、こんな「弱点」をみれば、サムもやはりちょっとヘンな奴……？

それはともかく、実はヘンリーもその恋人のアシーナ（エリザベス・リーサー）に対して、渡すべき結婚指輪を購入しているのに、サムと同じように、これを渡せないらしい……？

こんなヘンな共通点を持つこと自体、どこかヘン……？

レオン博士とは……？

盲目のレオン博士（ボブ・ホスキンス）はサムのチェス相手だが、ヘンリーは、「レオン博士は自分のせいで亡くなった父親だ」と主張した。しかし、レオン博士には子供はいない。

一体これはナニ……？ パンフレットによれば、観客は頭ではなく、感覚でこのレオン博士の存在をよく考え、味わう必要があるらしいが……？

トリスタン・リバーとは……？

21歳の誕生日の日に自殺という予言の意味を正確に理解するためには、トリスタン・リバーという画家が、18歳の時にあと3年生きると言い残し、自分の作品を全部焼いて自殺したという前提話が大切。しかし、私たち日本人の観客は、そんな画家もそんなエピソードも知らないのが当然。したがって、ヘンリーやライラが描いた「抽象画」が何を意味するのかも含めて、要するにサッパリ訳がわからない……。これでは、ほぼお手上げ状態……？

私は早々とリタイア……？

この映画の謳い文句は、「超一級のスリルと感動のイリュージョン・スリラー!!」であり、観客への挑発文句(?)は、「この映画の謎は、頭で考えても決し

て解けない……」と「あなたの感覚が試される！ 潜在意識を刺激する〈感じる映画〉」というもの。またこの映画は、いわゆる「サイコスリラー」とか「サイコサスペンス」と呼ばれる範疇の怖いものではないが、訳がわからないという点では共通……？

したがって、もともとこの手の映画があまり好きでない私は、物語(?)の途中から早々とリタイアしてしまうことに……。しかし、我こそはと思われるあなたは、是非チャレンジを……。途中、若干居眠りをしてしまった私も悪いが、「居眠りさせられた」と強弁のうえ、この映画についての私の採点は星2つ……。

2006(平成18)年4月21日記

ミニコラム

夫婦50割引 VS 高校生友情プライス

06年は日本映画が好調で、数十年ぶりに興行収入が洋画を上回る可能性がある。これには、シニア料金(60歳以上1000円)、夫婦50割引(50歳以上の夫婦1人1000円)の寄与がある。そこでこれに対抗して(?)、「映画に行こう! 実行委員会」が05年から始めたのが「高校生友情プライス」(3人以上なら1人1000円)。3人以上というのは、映画を観て語り合おうという趣旨が含まれているが、その利用率は芳しくないらしい。邦画の好調には宮崎アニメの他、『踊る大捜査線』シリーズや『海猿』『デスノート』等の大ヒットが寄与しているが、よく考えてみればテレビドラマの映画化やコミックの映画化が顕著で、その市場は若者向け。今夏はDVDドラマを映画化した

大塚愛の『東京フレンズ』や『タッチ』に続く長澤まさみの『ラフ』が公開される。これらの作品を「友情プライス」で観て語り合うのもいいが、邦画があまりその路線を突っ走ると、『バットマン』『スパイダーマン』『X-MEN』『スーパーマン』などアメコミ路線に走ったため、落ち目になっている(?)ハリウッド映画の二の舞になる危険性も……? 同じ若者向けでも、大ヒットした『世界の中心で、愛をさけぶ』(04年)や宮崎あおいの『好きだ、』(05年)、『初恋』(06年)、そして今秋公開の『シュガー&スパイス 風味絶佳』など、真に良質な邦画を観て語り合ってもらいたいものだが……。

2006(平成18)年8月17日記